

六甲山自然案内人の会 平成22年9月度定例観察会報告書

実施日：平成22年9月12日（日）

コース：護国神社～杣谷～穂高湖～天上寺～掬星台

テーマ：カスケードバレーの自然を探る（3班担当）

参加人員：ビジター28名、会員17名、合計45名

当日の配付資料：コース地図とカスケードバレーの植生

【観察記】

集合は護国神社に9時ということで、8時半すぎから観察会参加者が集まってきた。順次手続きを済ませ人数を確認。コースの道幅が狭いことなどを考慮して、4つの班に分けて行動することとした。出発に先立ち、カスケードバレー（杣谷道）が徳川道の一部なので、徳川道の歴史を解説。

徳川道（西国往還付替道）

作った当時は「西国往還付替道」と呼ばれていた。西国街道のバイパスで、起点は石屋川。杣谷、摩耶山北側、現在の森林公園、小部、藍那を通過して大蔵谷付近で西国街道と合流。兵庫開港後、そこに居留する外国人とのトラブルを避けるために作られた（第2の生麦事件を防止することが目的）。

兵庫開港と同時に道は完成（慶応3年12月7日）。しかしこの2ヶ月前に將軍慶喜は大政奉還。完成の2日後（12月9日）には王政復古の号令とめまぐるしく時代は変貌。結局大名行列には使われなかった。

ところが、徳川方の動きを牽制するために新政府の要請を受けた備前岡山藩が西国街道を上京した際、三宮付近でフランス人と接触。いわゆる神戸事件が勃発（詳細は大丸近くの三宮神社の碑を参照）。これを受けて、備前岡山藩の後続部隊が西国往還付替道を上京したのが、本来の目的として使われた唯一の例。

その後、六甲山の外国人を中心とした登山ブームで道が見直され、大正時代には「徳川道」として呼称されていたとのこと。

9時20分、1班から順次出発。住宅地沿いの日当たりのいい舗装道路を上ってようやくハイキングコースの入り口へ。入り口手前左手にはナナミノキ、クマノミズキ、蔓性のエビヅルなど。ここから木陰の小径となり、階段を上って最初の堰堤を通過。2番目の堰堤下にイヌビワの雄株。残念ながら果実は干からびたものが数個着いていたのみ。

2番目の堰堤を上って左手にナナミノキ、イボタノキ、沢を2つ渡って陽光差し込む広

場に到着。エビヅル、ノブドウ（紫や青の果実、これらは虫が寄生しているため）、ツルウメモドキなどが低木の植物に絡みついている。この辺で多く見られた植物としてアカメガシワ、ニセアカシア、フサフジウツギなど。草本のオオオナモミが実をつけていた。オナモミ類の実は棘の先端が鉤状に曲がっているため、衣服の繊維にひっつきやすくなっている。この原理を利用してマジックテープが開発されたとか。

広場から右手に入り再び木陰の小径に。しかし、ここからきつい坂道の連続。しばらく進むと、左手にヤマコウバシ。冬に枯れ葉を残したまま越冬している姿で確認できるが、夏場に見ると何の特徴もない植物。葉をもむと香気が漂う。コバノガマズミが小さな実をつけていた。ナナミノキに加え、リンボクが確認できるようになる。

3番目の堰堤付近に、裂開した果実をつけたキリ。付近には、コナラやアカガシの果実をつけた枝先が落ちているのが目につく。よく見ると殻斗（どんぐりの帽子）に穴。これはハイロチヨッキリが殻斗を通してドングリ部分に産卵し、その後に枝ごと切り落とす習性があるため。やがてリンボクが立ち並ぶ小径に。林床部にはヒイラギのような葉をした幼木がある。リンボクは常緑樹であるがサクラの仲間、谷間の湿った土地を好み、9月～10月に房状の花をつける。成木になると葉縁の棘はないが、幼木ではヒイラギのように棘をもつのが特徴。「徳川道」を解説した看板（気づいた方はおられるだろうか）の近くにキハギ（黄色の萩ではなく木の萩の意）。沢を渡って4番目の堰堤下に到着。ここではユザンショウを観察。常緑のサンショウの仲間。金平糖のようなごつごつした実がなっていたが、葉も少なく全体的に貧弱であった。六甲山系では少ない植物と言われている。



4番目と5番目の堰堤を右手に見ながら登りが続く。登り切ったところにキブシ。すでに来年の花芽をつけている。ここから径も細く、アップダウンもあり、歩くには注意が必要だ。しかも暑くて汗だく、観察どころではない。6番目の堰堤が見えたところで沢を横切る。沢の水は気持ちいい。7月の下見の時は水量が多く、堰堤の上から水がしたたり落ちる光景は見事であった（当日は、残念ながら下から放水）。

沢を渡って鉄梯子の登りが続く（配布した地図では杣谷の左側に歩道が記されているが、実際は右側を歩いている）。左手の6番目と7番目の堰堤を通過し、ホオノキが右手に。このホオノキは株立ちしている。まもなく8番目の堰堤が見えてくるが、そこまでは湿った岩が続く。ここでダイモンジソウを確認。やがて木ノ袋谷との合流地点へ。

木ノ袋谷から石段が続く。イタビカズラが右手に。花が咲いていた植物はミスヒキ、キソミスヒキ、クサアジサイ、ヤマトウバナ、ミヤマウズラ、アキノタムラソウ、ヒヨドリバナなど。沢沿いの岩の上には一輪のヤマジノホトトギス、思わず「岩路のホトトギス」の声も。9番目の堰堤を過ぎて右手にサカキ。最後の階段手前にクマヤナギ。昔はこの枝を馬の鞭に利用していた。六甲山南斜面では、冬季に氷結する唯一の滝がこの付近にある。



12時、杣谷峠に到着。トイレ休憩をすませ、昼食場所の穂高湖へ。下り坂途中左手にキガンピの小さな黄色の花。穂高湖では、湖面を渡る風に涼を感じることができた。

12時40分、1班から順次出発。自動車道沿いの歩道を通って天上寺へ。この路沿いは、アカガシやナナミノキのような高木の植物でも上から眺められる絶好の場所。丹生・帝釈山系も臨むことができた。花が咲いていた植物として、クズ、ヌルデ（雄株は白色の花、雌株は薄紅色の花）、ウド、アカメガシワ、フサフジウツギなど。赤い色が目立ったのは、クマノミズキの果軸、サルナシの葉柄。



ヌルデのゴール（虫こぶ）

ヌルデの小葉の基部に写真のようなゴールが見られた。これは、ヌルデシロアブラムシという体長約 2mm の昆虫の仕業。

中は袋状になっており多数のアブラムシが生息している。秋になって、このゴールから多数の羽を持ったヌルデシロアブラムシが出てきて、チョウセンゴケという植物に移住する。

この虫瘤にタンニンが多く含まれることから、昔はお歯黒の原料として、最近までインクの原料としても使われた。



天上寺では山門右手のスギの巨木に圧倒される。石段を登ると紅白のサルスベリ、オオカメノキ、ハンカチノキ、ナツツバキなど栽植樹の出迎えを受け境内へ。境内には秋の七草のうちオミナエシ、ススキ、キキョウ、ナデシコ、ヤマハギを見ることができた。

摩耶山天上寺

646 年（大化 2 年）インドの法道仙人が現在の地に開いたとされる（インドから雲に乗ってきたなどの逸話がある）。本尊は大きさ約 6cm の十一面観音、これは 33 年に 1 回の開帳。

806 年（大同元年）弘法大師が唐から摩耶夫人尊を持ち帰り、山上から南面に寺を移して本尊として安置。

1971 年（昭和 56 年）賽銭泥棒の仕業により南面の天上寺が焼失。

1980 年（昭和 60 年）現在の地に金堂が再建され、2002 年（平成 14 年）には摩耶夫人堂が建立。

新西国三十三番箇所 の 22 番所、関西花の寺二十五番霊場の 10 番所などでも知られる。



14 時 10 分、予定より早く掬星台に到着。来月の観察会のお知らせをして解散。

【後記】

初秋のさわやかな秋空のもとで観察会を期待された方も多かったと思います。しかし、今年はいにくの猛暑が続きました。それでもビジターの方 28 名を含む 45 名も参加し

ていただきました。また、護国神社でリタイヤした会員1名を除いて、全員が汗だくになりながら柚谷の登りを完歩することができました。参加した皆様、お疲れ様でした。観察記では、柚谷に多い植物、花や実が着いていた植物を中心に記述しましたが、それ以外は当日配布した資料をごらんになって、つらかった上り坂を思い出してください。

3班の企画に当日ご協力いただいた他班の会員の皆様、ありがとうございました。